

4. 3. 2 地形・地質構造の設定

ここまでに示した図面および参考文献をもとに、模式地質断面図を作成した(図-4.3.2.1)。解析対象地周辺には下位から上総層群の砂質土・粘性土層が広く分布しており、その上位の多摩川左岸側(台地側)には青梅礫層、右岸側(草花丘陵)には飯能礫層相当層が堆積している。青梅礫層上位には、立川面に立川礫層、拝島面に拝島礫層が分布する。草花丘陵・立川面(及び拝島面の一部)の地表部には関東ローム層が薄く被覆している。多摩川沿いには主に多摩川河床礫が堆積する。

上総層群の分布深度は資料が少なく、また層相も礫混じり砂質土等が多いため、上位の青梅礫層との層境界が判別しにくい。関東一縁で俗称される「土丹」(粘土とシルトが固結した層)は部分的に確認されている。

草花丘陵は主に飯能礫層で構成され、丘陵北側の一部には固結岩が露頭している。飯能礫層相当層は直径数～数十 cm の亜円・亜角礫を主とする。

青梅礫層は、東京周辺に広く分布する東京層群の最下部に位置する砂礫層で、立川・拝島段丘礫の下一帯に堆積する。下位の上総層群とは不整合に堆積し、場所により層厚は異なると推定される。

立川礫層・拝島礫層は、旧多摩川の河床礫により形成された砂礫層である。概ね台地面に平行に堆積している。両層とも直径数十 cm の玉石を多く混入し、基部には粗砂が多い。

関東ローム層は草花丘陵の尾根部、立川面の台地上に層厚 2m 前後で広く堆積している。

多摩川低地の中下流域に発達する沖積層は、玉石を多く含む砂礫(多摩川河床礫)が主体である。表層には河川氾濫堆積物である礫混じりの砂質シルト・シルトが薄く分布する。

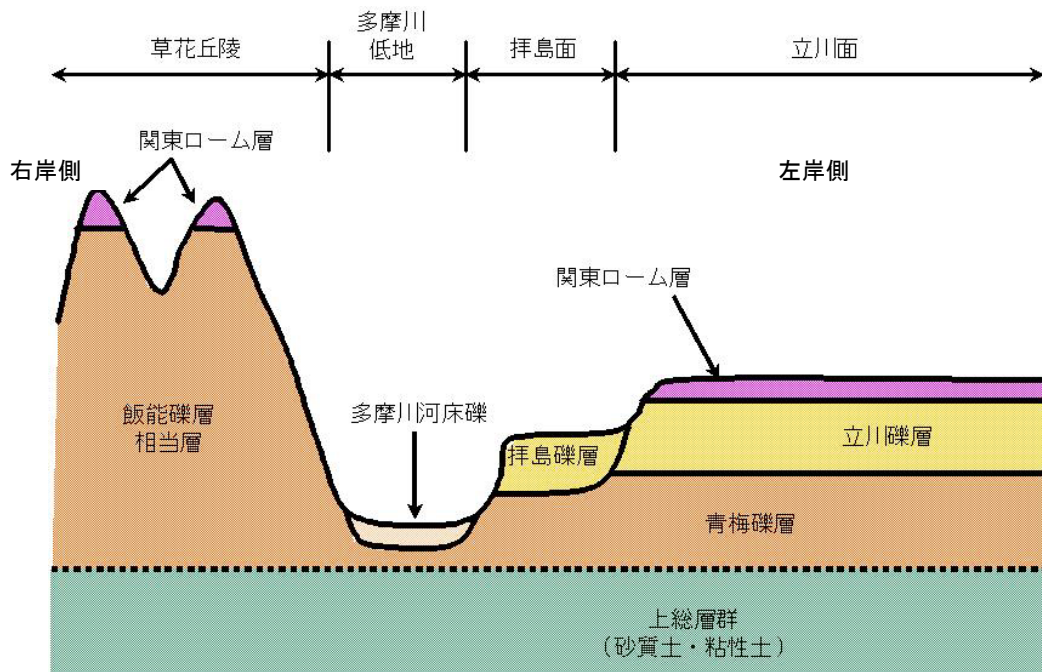


図-4.3.2.1 対象フィールドの模式地質断面図

図-4.3.2.1 と資料をもとに設定した各地層の分布厚の設定一覧を、表-4.3.2.1 に示した。

■多摩川河床礫

ボーリング柱状図・断面図から、多摩川低地部の河床面から下 5.0m の厚さとした。

■関東ローム層

関東ローム層厚図から、立川面の地表面から下 2.0m の厚さとした。なお、資料によれば
 拝島面の一部にも関東ローム層が堆積していると図示されているため、拝島面の一部にも
 地表面から下 2.0m の厚さを与えた。

■拝島礫層

堆積層厚及び基盤岩岩相図から、拝島面の地表面またはローム層の下 2.5m とした。

■立川礫層

堆積層厚及び基盤岩岩相図から、立川面のローム層の下 7.5m または 12.5m の厚さとした。

■青梅礫層、飯能礫層相当層

層厚に関する資料に乏しく、断面図でも全体の分布が図示されていないため、後述の上
 総層群上面と立川礫層・拝島礫層の間に分布するとした。

■上総層群

武蔵野台地周辺における上総層群上面の傾斜・形状から、解析対象地周辺の分布を推定
 した。その結果、立川面では概ね地表面の下約 30m の深度に上総層群上面が分布している
 とした。

表 4.3.2.1 対象フィールドの地形区分別の地層分布厚の設定一覧

	多摩川低地・川谷底	拝島面	立川面	草花丘陵
多摩川河床礫	河床面下 5.0 m	-	-	-
関東ローム層		(一部地表面下 2.0 m)	地表面下	2.0m
拝島礫層		地表面またはロー ム層下面 2.5 m		
立川礫層			ローム層下面 7.5~12.5 m	
青梅礫層		立川礫層～上総層群の間		
飯能礫層相当 層				ローム層下面 ～上総層上面
上総層群およ び相当層	立川段丘面の地表面の下 30 m 前後に堆積していると仮定し、 地形標高から上総層上面の分布を推定			